

授業からフィールドへ

ボランティア論・くらしと文化・茨木交流倶楽部

瀧 端 真理子（人間学部心理学科）

2004年度より、新設の追大プロジェクト科目「ボランティア論」を担当することになった。瀧端とボランティアは、最もふさわしくない組み合わせだとは思ったが、考えるところあって、この授業を引き受けることにした。これに伴い、特色ある教育（高等教育研究改革推進経費）の個人枠に「ボランティア論」（春学期）・「くらしと文化」（春・秋学期）の抱き合わせで申請、採択された。予算の大半は、「ボランティア論」で使う予定であったが、柔軟性を持たせるために「くらしと文化」との抱き合わせとしたのである。

「ボランティア論」を引き受けるにあたって考えた原則は、ボランティアは自主的・自発的活動であることを徹底し、歴史的社会的な文脈に即して「ボランティアという現象」を客観的に分析する、実際に活動をしている人をゲスト講師として招聘し、学生たちの視野を拡げるとともに、次年度以降の授業につながるよう、さまざまな人的ネットワークの構築や、資料・情報の蓄積を図る、NPO、NGO、公益法人制度、企業メセナなど、ボランティアと関連の深いテーマにも触れ、実践的な活動にも役立つ知識・情報を提供する、の3点であった。

このような方針のもと、「ボランティア論」の授業では、現在、生き生きとした活動を行なっている比較的若手の方々を、ゲスト講師として学内外からお招きした。実施日と内容のダイジェスト、講師プロフィール等は以下の通りである。

（1）2004年4月23日「高槻ジャズストリートの世界～あなたも参加してみませんか～」

ゲスト：高槻ジャズストリート実行委員会メンバー

福永孝文さん（追手門学院大学文学部1999年卒業）

石津和子さん（追手門学院大学経営学部2回生）

石黒利春さん、山本安伸さん、小林浩さん、真鍋宗一郎さん

内容：高槻ジャズストリートの沿革・運営組織・資金・活動の魅力やなぜボランティアとして関わっているのかをリレートーク、また活動の予算・決算の一覧なども後日紹介いただいた。映画研究部シネマクリエイターに撮影してもらった過去のジャズストリート記録ビデオも上映。

(2) 2004年5月7日「エコミュージアム活動というボランティア」

ゲスト：浅野敏久さん（広島大学総合科学部助教授）

内容：フィールドで学ぶ，フィールドから学ぶことの魅力を，「広島エコミュージアム研究会」での活動紹介を通じ，この位のことは誰でもできると感じてもらう，実践への誘い。

講師プロフィール：専門は人文地理学。研究テーマは「環境運動と地域」。調査フィールドは，霞ヶ浦，中海・宍道湖，諫早湾，韓国のセマンガム開発。その他，東広島周辺で環境を活かした地域づくりなどの実践研究。出身は東京大学（教養学部，理学系大学院博士後期中退），民間企業（コンサル）勤務を経て，1996年より広島大学総合科学部広域文化講座。

(3) 2004年5月14日「ボランティアの多様性～京都市青少年活動センターの事例から～」

ゲスト：大場孝弘さん（財団法人京都ユースホステル協会）

内容：「ボランティア」という言葉は人によって捉え方が違い，そのことで，ボランティアをする人，サービスを受ける人，受け入れる団体の中で，トラブルや摩擦が生じている。京都市の青少年活動センターの事例を紹介しながら，トラブルを未然に防ぐ方策を考える。また，自分で始めたいと考えた時の参考に，福祉的活動以外の様々なボランティア活動の例を紹介。

講師プロフィール：（財）京都ユースホステル協会職員として京都市の青少年活動センターやユースホステルなどでボランティアをする多くの青少年と関わる。現在は，京都市伏見青少年活動センターで多文化共生の視点で青少年の自立を支援。

(4) 2004年6月11日「島が丸ごと博物館（ミュージアム） 持続可能な里海づくりにむけて」

ゲスト：神田優さん（NPO法人黒潮実感センター）

内容：高知県西南端に位置する周囲4 kmの柏島は，古くから漁業で栄えてきたが，昨今漁業不振にあえいでいる。一方，透明度30mを誇る海とその数日本一の1000種の魚類が生息し，日本有数のサンゴの群生地が広がる柏島は，スキューバダイビングや磯釣り渡船業が新たな産業として定着しつつある。黒潮実感センターではこの島の自然と人々の暮らしを丸ごと博物館と捉え，人と海が共存できる持続可能な里海を作るべく活動。NPOとしてのセンターの役割やありかたと，地域住民，島外者との関係性について考える。

講師プロフィール：1966年高知市生まれ。高知大学農学部栽培漁業学科卒業後，東京大学海洋研究所で大学院博士課程修了。農学博士。専門は魚類生態学。学生時代は釣りとダイビングガイドで生計を立てつつ学問に励む。潜水時間5,000時間以上。1998年，単身柏島に乗り込み，2002年NPO法人黒潮実感センターを立ち上げ，現在センター長。島の自然と人の暮らしが両立する，持続可能な「里海」づくりに挑戦。

(5) 2004年6月25日「私の（ボランティア）体験談」

ゲスト：藻川芳彦さん（追手門学院大学職員）

内容：仕事とボランティア活動の両立，息の長い活動の継続など，今後，実社会に出てからボランティア活動を行いたいと思ったときに役立つ，藻川さん自身の活動体験を話していただく。

講師プロフィール：「生き物好き」がきっかけで，長年，自然保護・環境保全活動に取り組む。現在，伊丹市みどりの市民会議委員，昆陽池ビオトープづくり運営委員，伊丹市昆虫館友の会運営委員。

(6) 2004年7月2日「アート・ボランティアのすすめ～劇場寺院・應典院と若者たち～」

ゲスト：秋田光彦さん（大蓮寺住職・應典院主幹）

内容：大阪ミナミの隅に，お葬式をしないお寺・應典院を再建して7年，劇場型の本堂では，小演劇の公演や現代アートの展示が連日催され，年間3万人の若者で賑わう。その運営を担うのは市民や学生のアート・ボランティア。さまざまな表現活動を通して，他者と生きること，自分らしく働くことを学ぶ若者たちの姿を紹介。

講師プロフィール：1955年大阪市生まれ。大学卒業後，ぴあ，アミューズなどで映画プロデューサーとして活躍，その後出家して，97年劇場型寺院・應典院を再建，NPOや若いアーティスト支援のコミュニティ拠点として知られる。人生の末期を支援するエンディングサポートにも取り組む。

以上が春学期の取り組みであり，高槻ジャズストリートでは，学内での広報をきっかけに，ボランティアスタッフとして複数の在学生在が参加した。5月3日・4日のジャズストリート終了後，受講生の石津さんの強い勧めもあり，5月16日，高槻市民会館で開催された高槻Jazz Street実行委員会反省会に，筆者も出席した。ここで始めて具体的にどのような人たちが，どのようなやり方でJazz Streetを運営しているのかを目の当たりにした。さらに，5月26日，高槻Jazz Streetの創案者である北川潤さんを訪問，8時間にわたってぶっ通しで北川さんの波乱万丈の人生，やりたいことを実行していく方法，組織の作り方などを伺ったことは，たいへん刺激的であった。

春学期は慌しく過ぎ，筆者自身は，自分がお話を伺ってみたいと思っていた講師陣をお招きし，楽しくはあったが，受講生たちには，高槻ジャズストリート以外は特に積極的にボランティアへの参加を呼びかけることもなかった（もともと，ボランティアは自発的意志によるものであるから，授業は授業，と割り切っていた）。

一方筆者は，2003年から関わっていた茨木市中心市街地活性化検討委員会からのご縁で，大阪大学大学院工学研究科の岡絵理子さんから，「クルマに依存しない郊外生活の可能性に関する研究会」へのお誘いをいただいた。この研究は，本学院も賛助会員となっている北大阪急行線延

伸推進会議からの受託研究であり、阪大、大阪外大、追手門の教員、行政関係者を核とし、ゲストスピーカーほか、府職員、民間コンサルタントなどが随時加わり、阪大の学生・院生たちが基礎的な調査やデータの分析・発表を行うという形式で、文系の大学・大学院教育しか経験したことのない筆者としては、圧倒されることばかりであった。開かれた研究会の際には、本学卒業生の岩切翔君を誘い、郊外生活の事例発表をしてもらった。学生・院生時代から、アンケート調査やフィールド調査の手法を学び、マップ等を作成し、パワーポイントでプレゼンテーションを行い、学内外の大人たちから具体的改善点を指摘され、行政やコンサルとのやりとりも目の当たりに観察でき、もちろん就職活動にも役立つ、という教育方法に大きな刺激を受けたのである。

もう一つ、2004年度に学んだのは、武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科の及部克人さんの、学生・院生・卒業生とのネットワークづくりであった。学生・院生たちを博物館実習で仙台まで引率し、夜は夜で仙台在住の卒業生を呼び出し、卒業生は自分が仕事で制作した作品を取り出す。先輩から後輩への伝達、在学生にとっては、身近な存在から将来の自分の姿をシミュレーションできる、こうした機会を門下生に与える及部さんのパワーに感じる点が多々あった。

筆者自身の中で、ゲスト講師をお招きし、学内で講演会をしてもらおう、それだけでは物足りない、という思いが徐々に強くなってきたのである。そのような中で、2004年度最後の講演会を、「くらしと文化」の授業の中で実施した。講師は、「クルマに依存しない郊外生活の可能性に関する研究会」の第1回ゲストスピーカーであった、森栗茂一さんである。

(7) 2004年11月15日「地域の交通は、地域でつくる～市民の前に立ちはだかる壁、壁、壁」

ゲスト：森栗茂一さん（大阪外国語大学教授）

内容：神戸市の東灘市民交通会議が、コミュニティバスを365日走らせるために奔走、本格運行までに次々と立ち現れる妨害者・既得権維持者が協力者へと変貌していく、市民合意にもとづき地域の交通を再構築していくプロセスを実体験から語っていただく。

講師プロフィール：40歳で阪神大震災に遭遇、市民まちづくりに寄り添うような民俗学をめざすと決意。子育てでコミュニティのあり方や、高齢者福祉と子育て支援との連動、それに関連したエココミュニティ交通のあり方に関心を持つ。現在、NPO神戸まちづくり研究所で、コミュニティ交流型修学旅行を実践、自律的観光の実験研究を行っている。

自分たちの欲しいもの（この場合はバス便）を「社会的起業」として実際に実現させてしまった森栗さんのパワフルな講演に、いつもはうるさい学生たちもたいへん静かに聴き入っていた。またこの日は、本学教育研究所の沢田さんが、本学公開講座受講生宅へ案内八ガキを郵送してくれたため、茨木市民の方々も、10名程度参加して下さった。

以上の経緯を踏まえ、2005年度のシラバスを組むにあたって、いつまでも大学の中で授業だけしていてもつまらない、という結論に達した。『平成16年度特色ある教育報告集』掲載の拙稿

では、茨木市では、ダンボール箱の中に入って歩行者の反応を伺うプロジェクトなど、「ありえない」と書いた。その「ありえない」の実現に向けて、一步、踏み出したのである。

実は春先から、阪急本通商店街の空き店舗を借りて、現代アートの展示ができないか、と考えていた。Jazz Streetの北川潤さんからは、空き店舗2階一つだけなんて、そんなちっぽけなことをやったらいかん、とアドバイスされた。また、6月と8月に沖縄へ行く機会があり、先端的なアートイベントwanakio2002、wanakio2003の会場となった、農連市場、ガープ川水上店舗、桜坂、前島三丁目などを見て回った。ガープ川水上店舗は、どことなく、茨木の阪急本通商店街界隈と似ているのである。これなら、茨木でもやれるのではないかと思った。

Wanakioに関わったNPO 琉・動・体代表の上江田常実さんに電話をかけ、2005年度のボランティア論のゲスト講師と、茨木交流倶楽部での市民向けワークショップの開催を打診した。一方、昨年、学生たちを引率してはじめて参加した「まちづくりカレッジ」(佐賀市内にて2004年3月6日・7日開催)が今年度は那覇市内で開催されるため(2005年3月5日・6日開催予定)、担当授業で幅広く学生たちに声をかけ、現在、茨木交流倶楽部の夜間営業日に学生たちが三々五々、参加してくれている状況である。本学学生10名程度、阪大や近大の学生・院生を含めた学生用のMLの世話役は、心理学科2回生の中矢雅男君が買って出てくれた。

茨木市の都市計画課、商工労政課、茨木商工会議所など、多くの方々の協力を得て、2005年度の茨木市内と追手門学院大学構内でのアートイベント立ち上げ計画が、現在進行中である。まずは勉強会から、ということで、2005年1月14日、NPO 琉・動・体代表の上江田常実さん、CAFE LINEのムトウイサムさんに、ゲストとして茨木交流倶楽部にお越しいただき、茨木市の市民のみなさんや学生・卒業生たちに、DVDなどでアートイベントのイメージを実感してもらった。こうして、アートとは何ぞや、の議論がまちなかで始まりだしたのである。

最後に印象的な記憶を記しておきたい。武蔵野美術大学の及部克人さんから昨夏、お話を伺っていたときのことである。東京芸大の学生だった及部さんたちの世代の上にはデザインという言葉を使う先生はおらず、1959 - 61年にかけて、新宿の喫茶店を大学にいくつもの大学の先生たちを呼び出して、学んだのだという。現在は、大学の授業の枠内で、学生たちが専門家を呼び、講義の準備をし、質問を準備する、といった擬似的な体験が技術的には可能で、実際にやっている大学がある、しかし、これらは表層的なものであって・・・といったお話であった。

筆者自身、社会人学生として大学に編入学した折に、先輩たちが作った自主ゼミを拡張させ、学内のめばしい先生たちを学生有志でくどき落としにいった経験を持つ。学内非常勤講師月額500円だかの悪条件にも関わらず、2人の先生方があらたに引き受けてくださり、なぜか単位まで認定されたのであった。自分たちが必要とするものを、自ら生み出していく活動・行為には、身近なお手本も時には必要であろう。筆者の場合は、自主ゼミの先輩や同級生たちから学んだ点が大きかった。筆者自身が茨木というフィールドでごちゃごちゃやっている姿を見て、学生たちも、何か自分自身の学びの場を切り拓いていってくれたら、と願っている。